

学生の自己肯定感を生み出す保育を“楽しむ”行為について —養成校における学生の保育参加や保育者との対話を通して—考察

三上 佳子*
滋賀短期大学 幼児教育保育学科

About the act of "enjoying" childcare that creates a sense of self-affirmation for students
-Through student participation in childcare and dialogue with childcare workers at the training
school-Consideration

Yoshiko MIKAMI*
Department of Early Childhood Care and Education , Shiga Junior College

抄録：本稿では、滋賀県の「1年以上3年未満」や「1年未満」の保育者退職率の増加や、本学で1年以内に休学・転科をする保育者をめざす学生の増加の現状を受け、継続意欲をもたらすためには保育を“楽しむ”という行為が必要であるという仮説を立て検証を行う。今回、1回生の保育参加時の振り返りレポートや2回生の保育実践事例を通して、学生が子どもと遊びを“楽しむ”行為や子どもの主体的な遊びに楽しさを見出し関わる姿を取り上げた。また保育者との対話を通して、自己が満足され、保育の楽しさを実感していく姿もみられた。結果、楽しさの生成過程を支えるのは、子どもや保育者との関係性の中で熟成される「子どもと遊ぶ楽しさや満足感の共有」や「保育者との対話を通して感じる保育の楽しさ」であり、その積み重ねが学生自身の「自己肯定感」にもつながっていくことが見えてきた。

キーワード：楽しさの生成過程，子どもと遊ぶ楽しさや満足感の共有，
保育者との対話を通して感じる保育の楽しさ，自己肯定感

1. はじめに

滋賀県保育士実態調査報告書¹⁾の保育施設調査によると、施設の過去3年間の

退職者(定年退職者除く)について勤務年齢別にわけると、自己都合で退職した保育士の勤務年齢別の比率は、いずれの年度も「1年以上3年未満」が最も多く3割を超え、「1年未満」の割合が年々増加し

* E-mail: y-mikami@sumire.ac.jp

ている。3年未満の退職者の増加の要因については、滋賀県保育士実態調査報告書の現保育士調査²⁾における「保育士として働くために重要なことについて」を参照する。「働くために重要」なこととしては、20歳～60歳代のいずれの年代も「子どもへの愛情」次いで「職場の人間関係」が多かった。特に興味深かったのは、20歳代が他の年代別に比べて多かったのが「プライベートとの両立」「仕事の量」「保護者との人間関係」であった。しかし「仕事へのやりがい」については、他の年代に比べ上位に入っておらず、やりがいを見出すに至っていない実態も調査から見えてきた。

一方で同調査の保育士養成学生調査³⁾における保育士の魅力については「子どもの成長を実感できそう」が95.7%と最も多く、次いで「自分の成長が実感できそう」が37.8%であった。また保育士になるにあたり不安なことについては、「保護者対応」が76.9%で最も多く、次いで「職場の人間関係」が70.3%、「命を預かること」60.9%、「ピアノ・製作など」52.8%となっていた。

本稿では、養成学校の学生の保育者になるまでの憧れや不安を踏まえ、保育者の第1歩を踏み出す学生対象に「子ども保育を“楽しむ”を掲げ検討していく。“楽

しむ”とは「満ち足りていることを実感して愉快的気持ちになる。」「好きなことをして満足を感じる。」「先のことに期待をかけ、そうなることを心待ちにする。」があげられていた。(デジタル大辞泉)⁴⁾久島・田島⁵⁾は保育者の保育を面白がるプロセスの中で、保育の楽しさとはそれぞれの主観が大切にされ、対話を通して自己が満足されていくこととも言える。そのプロセスにそれぞれの満足が生まれることで保育は、子どもにとっても保育者にとっても楽しいものとなっていくのではないかと述べている。

本研究の目的は、楽しさの生成過程は、遊びや子どもとの関わりや周りの人との対話によって熟成され、その積み重ねが学生の自己肯定感につながることを明らかにしていく。

2. 方法

2021年度、1回生119名を対象に、幼児教育保育学入門の授業で、本学附属幼稚園で計2回保育参加をした時の、振り返りレポート(回収率94%)及び2回生専門演習30名を対象に、本学附属幼稚園に毎週同クラスに保育参加した時の、振り返りレポート(回収率93%)を参照しながら、学生の自己肯定感を生み出す保育を“楽しむ”行為について考察する。

3. 楽しさの生成過程に必要な「子どもと遊ぶ楽しさや満足感の共有」

3.1 2回継続して保育参加をした1回生の振り返りレポートから見えた“楽しむ”体験の変化

本学では、幼児教育保育学入門の授業で、本学附属幼稚園の同クラスに保育参加をする機会が前期2コマあり、参加後に振り返りレポートを実施した。

1回目の感想表1と、2回目の感想表2を見ると、1回目は自分が子どもと触れ合ったり、遊んだりしたことの楽しさや保育者の関わりについて述べている記述が半数以上見られた。2回目は、子どもや保育者の言動を詳細に観察したり、子どもや保育者と関わったりする中で、一緒に楽しさを共有したりする記述が3割ほど増えた(図1.2)。

楽しさの生成過程は、子どもや保育者との関係性ができていくことによって、遊びの楽しさや満足感が共有され、自分の楽しさに広がっていくと考えられる。

初めて出会う子ども達との触れ合いが、『楽しい』と感じることは重要である。実習になると記録などいろいろな課題をもって保育に参加するため、今回のように子どもと自然に触れ合ったり、一緒に遊ぶ楽しさを十分体験する機会がより必要になってくる。

そのことが子どもと遊ぶ楽しさや満足感を共有する基盤になっていくことが見えてきた。



図1 1回生の保育参加 1回目 雲梯で



図2 1回生の保育参加 2回目石鹸で遊ぶ

(表1) 第1回目保育参加振り返りの記述より
対象者 1回生 119名(CとFは同一人物)

第1回目保育参加振り返りより		5月28日 6月25日	1回生119名
学生	視点	記述	
A	自分 子ども	・3歳児は、朝の会の時に何十人もいる中で今日誰が今日来ていないかをわかっていて、よく見ているんだなとびっくりした。また歌を歌っているに、一人の子に「上手!」と言ったら、もっと元気に歌ってくれて私も嬉しくなった。	
B	自分 子ども	・5歳児が「一緒に遊ぼう」と言ってくれたのは、すごく嬉しかった。いざ一緒に遊んだら、どのように声かけをしてどのように接したらいいか悩んだ。子ども達と一杯触れ合いたい。	
C	自分 子ども	・5歳児と、初めて出会った時緊張している子がいた。話しかけてみると嬉しそうに教えてくれたり、ぎゅっと抱きついてきて、私も抱き返すととても嬉しそうにニコニコしてくれた。	
D	子ども 自分	・4歳児が成長したチョウチョやテントウムシを先生と迷がす場面で、「お花の蜜食べれるかな」など話す子、名残惜しそうにする子、飛んだ時拍手をする子など集立っていく虫たちに思いを持っている子ども達に感動した。	
E	子ども 自分	・3歳児で自分のロッカーの下に帽子が落ちていた。隣の帽子の子だとわかったので私は声を掛けようと思ったら、その子が友達に届けてくれた。その後、その子は自分の帽子があるか確認していた。3歳児は私が思っている以上に自分で考えて行動する力があると思った。	
F	保育者 自分	・3歳児。着替えの時、先生は一人の子のボタンを付けながら、「Oちゃん着替えるよ」など全体を見渡して、すごいなと思った。そんな先生のことをイメージしながら保育について学びたい。	
記述		①子どもの姿や関わりから自分の感じたこと83% ②保育者の関わり15% ④その他2%	

(表2) 第2回目保育参加振り返りの記述より 対
対象者 1回生 119名(CとFは同一人物)

第2回目保育参加振り返りより		7月9日 7月16日	1回生119名
学生	視点	記述	
G	子ども 自分	・5歳児。子ども達の遊びの中に入っていくことで、子ども達も私も一気に「楽しい」が広がった。一緒に全力で遊ぶことが大切と思った。	
H	子ども 自分	・3歳児。A児が着替えて遅れて悲しそうな顔をしていたが、B児が「手伝ったあげる!」と言って一緒にしていた。この行為は、大人でもできない人がいっぱいいると思う。当たり前のように自分から人を助けられる姿に感動。見習わなくてはいけない大切なことだと思った。	
J	子ども 自分	・5歳児。最初は実習生と二人で鬼ごっこを始めたが、まわりの子が遊びに参加し、「遊びの輪が広がる」を実感した。また他のグループと一緒に「高い所に登るとつかまらない」などルールを話し合ったり、自然に変わったりに遊んでいた。子ども達は心から楽しんでいたので、変わったルールも受け入れていた。何を楽しんでいるかを考えて一緒に遊ぶことができて良かった。	
C	子ども 保育者 自分	・5歳児。先生が前で話している時、ずっとしゃべっていたり、遊んだりしている子がいた。周りの子が「ちゃんと話を聞く」などを掛け合っていた。また先生にできたものを見せた時「え～すごい。みんなみて」など子どもの目線になって一緒に喜んでいて、周りの子ども達にも伝えたり、抱きしめたりしていた。認めてあげるとすごいと思った。	
F	子ども 自分	・3歳児が水道ひの片付けの時、ゼリーのカップをいっぱい積んで持っていた。私が「すごい。いっぱい持っているね」というと「うん、いっぱい。何個あるんやろ」と言って、数えていた。私も一緒に数えた。疑問に生まれたことをしてきているって大切と思った。	
I	保育者 子ども	・4歳児。地震の避難練習で、先生が「ダンゴムシのポーズ・・・」など工夫して声を掛けたり、一人一人に応えたりしていた。保育で見ていて簡単と思っても、実際にやってみると戸惑ったり、慌ててしまうことが多い。すぐに対応できる保育者はすごい、カッコいいと思った。	
記述		①子どもの姿や関わりから自分の感じたこと63% ②保育者の関わり37% ③その他0%	

3歳児と関わった学生の2回目の振り返りレポートを紹介する。

・〇児は、砂場でバケツに砂と水を入れていた。バケツの水がこぼれると砂場に流れる水を見て『ピチャピチャして気持ちいい』と言ってどんどんバケツに水を入れた。水はどんどん流れ川になった。〇児はすぐく目がキラキラしてとても楽しそうだった。バケツに砂が残っているのに気がつき、とても不思議そうにのぞいていた。突然バケツをひっくり返し、何を作るのかと思うと、私に『山を作る』と言って作り始める。私も一緒に山を作っていると、周りの子ども達も集まってきて、どんどん大きな山になった。作っている時、子ども達は好きな食べ物などいろいろな話をしてくれて、とても嬉しかった。

1回生は、子ども達の興味関心に心を動かされ、子どもとの関わりの中で保育を素直に楽しむ姿が見られた。子どもは遊びの中で育つと言われるが、学生にとっても遊びや子どもとの関わりを通して楽しさが生まれ、保育者としての育ちにつながっていくと思った。今後も近隣にある本学附属幼稚園との連携を大切に保育参加を継続していきたい。

3.2 2回生の週1回の保育参加から見た“楽しむ”行為がもたらす、子どもや学生の変化

2回生の専門演習30名は、毎週1回本

学附属幼稚園の同クラスに保育参加をした。2回生は、1回生時に保育実習を経験しており、初めて保育を体験する1回生とは関わり方や見方が違った。2回生における“楽しさ”を見出すとはどのような姿なのか。事例1「子ども達と一緒に遊びを楽しむことを通して、変化する子どもや学生」図3.4.5や事例2「一緒に遊ぶ中で、間接的に見守りながら遊びを楽しむことを通して、変化する子どもと学生」図6.7について考察する。

<事例1>

【子ども達と一緒に遊びを楽しむことを通して、変化する子どもや学生】3歳児7月
怪獣になりきったCさん(2回生)と、作ったブロックを手にした子ども達が遊んでいる。Cさんは、「ウォー」と言いながら、逃げたり、怪獣のポーズをしている。子ども達もブロックで応戦し追いかけたり、思い思いの言葉で表したりしながら全力で遊んでいる。それをじっと周りで見ているハナコがいた。ハナコはCさんが真剣に怪獣になっているのを笑顔で見ていたが、急に走り出す。ハナコは周りの子ども達やCさんとは関わらず、一人で走っていた。しばらくすると、ハナコは自分からブロックを3つほど組み合わせ、Cさんの所に行くと2回ほど一緒に走る。それを見ていた担任のA先生がハナコと関わる。ハナコはうれしい表情でA先生と一緒に走り始めた。



図3 「楽しい雰囲気に興味をもつ」



図4 「自分からブロックで○を作る。」



図5 「実習生や担任と関わる」

子ども達と夢中になって遊んでいる姿から楽しい雰囲気が伝わり、自分で走ったり、ブロックで〇〇を作ったりし、同じ場に居ることを楽しんでいた。担任のA先生も、ハナコが自分から遊んでいる姿に感動し一緒に関わっていた。“楽しむ”という行為が、遊びの楽しい雰囲気を醸し出し、それぞれの遊びへと広がり、「遊ぶ楽しさや満足感」となったり、A先生の「ハナコの成長への実感」にもつながった。

遊びに参加した2回生のCさんは「最初、ブロックの取り合いをしていた子ども達が、私が怪獣になると互いにブロックを渡し合っ『これ、ここに付けよう』など言いながら一緒に楽しんで作るようになったり、みていた子が途中で参加したりする姿があった。片付けの時も『楽しかった』『またやりたい』と話す子がいて、とても嬉しかった。」と振り返っていた。楽しむ行為は、久留島・田島⁵⁾が述べているように子どもと保育者(学生)との関わりや対話を通して自己が満足され、子どもにとっても保育者にとっても『楽しい』ものとなっていくことがわかってきた。

事例1のハナコは、2回生のCさんが

<事例 2>

【一緒に遊ぶ中で、間接的に見守りながら遊びを楽しむことを通して、変化する子どもと学生】5歳児7月

5歳児のケイタとミツキが、カプラでダンゴムシの道を作っている。Dさん(2回生)は、声もかけずにじっと遊びを観ていた。ダンゴムシが動くため、カプラの道はどんどん広がっていく。ダンゴムシが逃げないように道に隙間がないように慎重に作っている。それをじっと見ていたDさんは、子ども達の遊びを心から楽しんでいるように見えた。廊下で始めたため、Dさんは、担任のB先生の助言もあり、子ども達と一緒にものをのけて場を広くした。そのことで道はどんどん広がっていった。ケイタとミツキは、ダンゴムシの家を作ることも考えた。また時折、ケイタとミツキがDさんに、作ったものを説明している。Dさんは、ケイタやミツキの話に耳を傾け、カプラを二人に渡したり一緒に作ったりしていた。



図6「カプラの遊びをみて楽しむ」



図7「カプラで道づくり」場を広くする

事例2では、“楽しむ”行為には、内的な表現もあることが見えてきた。2回生のDさんは、5歳児のケイタとミツキのダンゴムシの道づくりに参加し、言動はないものの、ダンゴムシの動きに合わせて次々とできてきたカプラの道にワクワクしながら傍で寄り添って観ていた。5歳児になると、友達との関わりの中で、主体的な遊びが広がっていき、その空間には保育者の言動が必要でない場面に出会う。Dさんは、子ども達の思いを受け止め場をひろげたり、カプラを渡したり一緒に作ったりしていた。ケイタやミツキも、あまり対話はなく遊びに没頭している姿があり、Dさんも二人の気持ちに共振しながらその場に居るように感じた。Dさんは遊び後、「ダンゴムシがいるので、『逃げる!』と言いながら一生懸命道を作っていて、見ていて楽しかった。道を広げる空間

を作ったことで長い道ができたときは子ども達と一緒にやった!という喜びが持てた。」と振り返っていた。「楽しむ」と言うとは全力で遊ぶイメージがあるが、子どもの思いや主体性を大切に共感し、必要に応じて支えることは、子ども達同士だけでなく、学生自身の楽しさにもつながっていくことが見えてきた。

4. “楽しむ”の生成過程に必要な「保育者との対話を通して感じる保育の楽しさ」

4.1 学生と保育者との対話が生み出す安心感・共感・自己の満足

2回生は、保育参加後に本学附属幼稚園の保育者と話し合う機会を設けた。学生は「子どもが楽しむために、保育者の関わりはどのようにすればいいか」など、自己課題をもって話し合いをしていた。保育者は、学生のわからないことや不安なことに耳を傾け、質問には真摯に答えていただいた<事例3> 図8。



図8 「学生と保育者の対話」

<事例3> 本学附属幼稚園の保育者と学生との対話—質問や悩みに応える。

Q：学生 A：保育者

Q：「子ども達が楽しむために保育者の関わりで大切なことは何ですか?」

A：「まず保育者自身が楽しむ。」「子どもが楽しいと思うことを一緒に遊び込む。」「子ども達の遊びをみてこんな楽しみ方があるといつも発見する。子ども達から楽しさを見出すことも大事。」「保育者自身もワクワクしながら、必要に応じてアイデアを出したり、選べるように用意したりすることが大切。」「保育者が関わったことで、子ども達の楽しさが半減したこともあったが、失敗しても慌てず気持ちを変換していけばいい。」

Q：「子ども達と遊んで楽しかった遊びを何か教えてください。」

A：「ドッジボールを5歳児とした時、本気で遊んだ。」「子ども達がライバルのように楽しかった。」「一緒に決めたルールを守るのは大事。守らないとみんなで楽しく遊べないことは言っている。」

学生は、保育の場面で感じたことや疑問を保育者に伝え、保育者と対話していくことで納得したり、自分なりの考えを見出したりしている。学生の対話後の感想に「先生方は、私の質問に丁寧に答えていただいた。今まで緊張して自分の思いをなかなか言えなかったが、何を言って

も大丈夫という安心感から、質問ができた。「最初、子ども達に積極的に関わらないと話をしてくれなくて少し心配だったが、一緒に遊んだり話をしたりしていくうちに、次第に子ども達から話しかけてくれ、私も思いっきり楽しめるようになった。」「環境を構成について知りたいと思っていた。3歳児のクラスではどんぐりに触れるように、ペットボトルのスライダーや色々な材料を用意していた。一人一人のどんぐりの遊び方が違い、改めて環境の大切さを具体的に学んだ。」など振り返りをしていた。

足立・柴崎⁶⁾は、新任期の保育者にとって必要なのは、「①自分の気持ちの共感してくれる人の存在」である。その人によって、自分の拠り所を獲得し、保育者としての自分の存在意義を明確化していく。しかしその一方で自分の技術不足を感じることも多くなる。そのため「②現在、抱えている問題を実際に解決してくれる人」が存在することが必要であると述べている。これは、学生にとっても同様に本学附属幼稚園の保育者は、①と②の役割を担っていただいた。保育者との対話によって、学生は自己が満足され、保育の楽しさを実感していく機会にもなった。また保育者になった時も、自分の困り感や考えを安心して出していくことを期待したい。

4.2 「対話が生み出す保育の楽しさ」

学生と保育者との対話で「子どもが楽しむために、保育者は何を心がけているのか」ということが話題になった。保育者はポンポンを事例にあげた<事例4>。

<事例4> 保育者との対話から、遊びを子ども達と共に創り出す楽しさを感じる。

3歳児クラス 10月

学生「子ども達が楽しむためには、どのようなことを考えて保育していますか？」

保育者「保育者が子ども達に楽しませるために用意するのではなく、子どもの発信を見逃さないようにしています。」「運動会で3歳児のリズム遊びに使っていた水色のポンポンがついているペットボトルがあったのですがポンポンを水に見立て消防の遊びをしている子ども達がいきました。使っていないホースを用意すると、子ども達はいろいろな所を火事に見立て懸命に消していました。」「子ども達の発想はすごいですね。私もワクワクして、子ども達の思いを聞きながら、火のイラストや段ボールを用意しました。段ボールは消防車になったりパトカーになったりして園庭のいたるところで消火が行われていました。」

学生「子ども達の見立てから消火の遊びに広がったのですね。」「子ども発信の遊びは違いますか？」

保育者「楽しさの深まりが違います。自分達の遊びなんですから・・・」「その後、タクシーなど子ども達によっていろいろな車が出てきました。その子なりのイメージや楽しさを大切にしたいと思います。」

保育者は、子どもの主体的な“楽しむ”行為を具体的に捉え、関わっていくことが保育者自身の楽しさ”にもつながっていくと考えられる。鈴木・森⁷⁾は子どもの“楽しむ”について、遊び始め・遊びの最中・遊び後の時間軸で33の概念、16カテゴリーで分析・評価をしている。子どもの遊びは変動的であり、その時々で“楽しむ”の質も異なる。ごっこ遊びというように大人が遊びに名前を付けることは、子どもの遊びを捉えやすくするが、一方でその遊びの中で変化していく楽しさの質を捉えづらくさせる恐れも含んでいることが示唆される。時間や状況によって変化する“楽しむ”の質をとらえることが肝要であると述べている。

今回、学生は保育者との対話を通し、主体的な遊びをきっかけに、遊びを創り出す楽しさを身近に触れる機会となった。楽しさの生成過程を支えるのは、保育者が子どもの思いや見立てを捉え、面白い受容力や遊び心と、子どもの変化していく楽しさを柔軟に受け止める対応力が求められていることが見えてきた図9。



図9 「みんなで火を消そう」

5. まとめと今後に向けて

5.1 まとめ 「保育の楽しさの生成過程が生み出す自己肯定感」

今回、子どもや保育者との関係性の中で熟成される「子どもと遊ぶ楽しさや満足感の共有」や「保育者との対話を通して感じる保育の楽しさ」が“楽しむ”行為を引き出し、保育の中で、自分なりの手応えを導いていった。自己の満足の積み重ねが学生自身の「自己肯定感」にもつながっていくことが見えてきた。

自己肯定感とは、特別支援教育大辞典⁸⁾によると「ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面も含めて、自分が自分であっても大丈夫という感覚である。」とある。今回の事例を見てみると、学生は、子どもや保育者との関係性の中で、思いのままに保育を楽しむ姿や子どもの主体的な遊びから楽しさを見出し、関わることで自分なりの手応えを感じている場面がみられた。そのことが自己肯定感を生み出す機会になった。

養成校時に、継続意欲の要因の一つとなる保育を“楽しむ”行為を体験し、学生が保育者と語り合いながら、子どもや自分自身の成長を実感し、自己肯定感を形成していくことを期待したい。

5.2 今後に向けて

今後、保育実践や学生と保育者との対話を継続しながら、継続意欲となる自己肯定感を生み出す保育を“楽しむ”行為を支える具体的な視点を追求するとともに、2年間の養成校の教育課程との関係についても考察していきたい。

謝辞

本研究は、学生と保育者が「保育者の子どもとの関わり」について、対話をしながら考察した。本研究を遂行するにあたって、本大学の附属幼稚園小野清司園長をはじめ、園の教職員にも協力をいただいたことに、深く御礼申し上げます。

文献・ビデオ

- 1) 滋賀県 滋賀県保育士実態調査報告書 (2020) (調査地域・滋賀県, 対象・保育施設調査 245 件 p25
- 2) 滋賀県 滋賀県保育士実態調査報告書 (2020) 現在保育士調査 4,972 件 pp88-89
- 3) 滋賀県 滋賀県保育士実態調査報告書 (2020) 保育士養成施設学生調査 468 件) pp155 -157

- 4) デジタル大辞泉 松村明編(2012) 小学館 <https://daijisen.jp/digital/>
- 5) 久留島太郎・田島大輔著(2020) 「保育者が保育を面白がるようになるプロセスの検討(1)」植草学園短期大学紀要 第 21 号 pp9-16
- 6) 足立里美 柴崎正行著 (2010) 「保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—」保育学研究第 48 巻第 2 号 p115
- 7) 鈴木・森著(2019) 「子どもの『楽しむ』を保育者はどのように評価しているか」 p45-54 愛知教育大学 幼児教育研究 第 20 号 pp45-54
- 8) 特別支援教育大辞典 茂木俊彦著(2010) 旬報社

* この研究は滋賀短期大学研究倫理委員会の審査を受けて了承です。